

## インドでのリコーダー指導日誌

佐野 和子

### 9月3日(日) 京都

最終の新幹線で京都に向かう、そしてすでに日付も変わろうという頃やっと西村宅に到着。

気がつけば京都駅に着いたときから私は「異邦人」。駅員さんからして京都弁だ！

京都の男性は親切で、夜間のため出口が分からずウロウロしていた私を見つけ、荷物を担って案内してくれた。

駅員さんもタクシーの運転手さんも親切で物腰が柔らかく、つくづく「男性の京都弁も良いなあ」と思った。



### 9月4日(月) 関西国際空港

乗り合いタクシーで関西国際空港へ向かう。福井さん、大塚君と合流。さらに空港で飯田さんと合流。メンバーがそろっていざ出発！タイを経て、深夜にムンバイ空港に到着。時差は3時間半。この何とも半端な時差に、初めての来訪である私は慣れるまでに時間がかかった。

### 9月5日(火) ムンバイ

今回の「通訳」でもある花谷さんと合流し、休養したあと近くを観光。そして夜にはコンサートのためのリハーサル。明日から子供たちへの指導が始まるので、私なりにどう指導していくかなど、指導のコンセプトを、かいつまんでメンバーに説明した。

### 9月6日(水) ムンバイ 「光の教室」1

いよいよ「光の教室」へ。私たちの乗った車が施設内へ入ると数人の子供たちが走り寄ってきた。彼らは、これまでに訪問経験のある4人のところへ行き、懐かしそうに挨拶をしていた。初めて訪問した飯田さんと私も、すぐに子供たちに囲まれ、名前を訊かれた。

子供たちの指導や、生活面の世話をしているらっしゃるシスターと先生たちにお目に掛かり、教室に案内される。

子供たちが落ち着いた頃を見計らって先ず私たちが一曲演奏。その後、今回のプロジェクトを理解して下さった吉澤 実氏の仲介で、私たちの要請に応じて「ヤマハ・アジアパシフィック営業本部」様が寄贈してくださった50本のリコーダーを子どもたちに贈呈した。



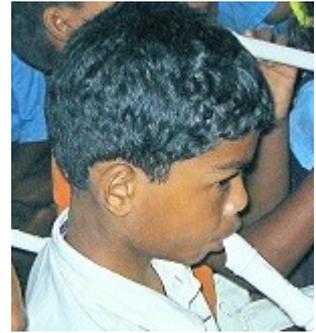
事前の打ち合わせで、先生方は、楽器は教室の方で管理し、個々には持たせないようにしていたらしい。そうしないと親が売ってしまうなんていう悲しい現実もあるようだ。こちらの方も使わせる子供たちに年齢の制限をし、年齢に達しない子供たちにはカスタネットなど配った。

今回、「子供たちにリコーダーの指導を」ということで、このプロジェクトに参加した私であるが、覚悟はしていたものの、大分楽観視していたことに今更ながら気がついた。先ず、いわゆる「固定楽器」が・・・無い！子供たちの環境に、ピアノはおろかオルガンさえもないのだ。一応、ドレミのヒन्दウー語は西村さんに教えていただいていたが、まだ子供たちには浸透していないようだ。

とりあえず子供たちの様子を見て、第一日目である今日は、リコーダーの紹介と、私たちの演奏だけにとどめた。子供たちは、私が持参したバスリコーダーにびっくりし、福井さんのマンドリンに耳を傾けていた。演奏の後、子供たちと「ぞうさん」の歌と、手遊びをした。初めての来訪である私に、子供たちは“やり方”を教えてくれた。先生の一人、キーボードとギターが出来コードネームが分かるということ。私が、個別にその方（フローラ先生）にリコーダーを伝授。その後、子供たちの給食の様子など見学して教室を後にした。

## 9月7日(木) ムンバイ「光の教室」2

リコーダーの指導二日目、教室で管理されていたリコーダーを子供たちに配ると、ピーピーと吹きまくる。  
持たせる子供の年齢の下限を決めたものの、子供たちの栄養状態は決して良いとは言えず、体は小さい。  
また、細かい指先を使うようなことをあまりしていないのか、器用ではない。



今日は、先ず体の力を抜くこと、そして指先に力を入れすぎないこと、また乱暴に吹かないこととトーンホールを開けたり閉めたりすることで、音が変わることに気づかせた。

右手はとりあえず足部管を持たせ、左手のみ正しい位置を指導。その組み合わせで、[ソ・ラ・シ・ド]の音階になることを説明。トーンホールに正しく指を置くことすら大変だった。  
他のメンバーにも協力してもらって早い子は10分ぐらいで出来た。再度全員に指の位置を確認し、一つ一つの音をゆっくり全員で出してみた。

だんだんと子供たちの音もリコーダーらしくなっていく、力まず息まず良い音になっていった。周りの大人たちが褒めると嬉しそうだった。子供たちの集中力なども考え、短時間で終了させ、後は手遊びや歌に切り替えた。



## 9月8日(金) ムンバイ「光の教室」3

指導のカリキュラムとしては今日で終わり。昨日の時点で四つの音は説明したものの、何とか出来たのは二、三人。今日も先ず全員で、一つ一つの運指を確認。子供たちの気持ちがほぐれ、力が抜けてきてから、[ド⇄シ] [シ⇄ラ]など、隣り合った音への移動をやってみた。

早い子は[ソ・ラ・シ]の三つをマスターし、移動が出来るようになった。意外に[ド]が難しく、[シ⇄ド]の移動は、他の音より時間がかかった。逆にこちらが難しいだろうと思った[レ]は、右手を固定したお陰で、[ド]の音をマスターした子はすぐに飲み込み、音を出すことが出来た。  
年齢の幅があり、成長に個人差のあるこの[教室]では、指導条件は悪いといわざるを得ない。しかし、子供たちの真剣な輝く目に引き込まれ、メンバーにも助けられて何とか頑張った。

夜、ホテルで再度コンサートに向けてリハーサルと確認。折しもムンバイは、「ガネーシャフェスティバル」の真っ最中。その模様がテレビ中継されていた。番組のバックグラウンドに流れていた曲を、耳コピーして採譜。  
明日の演奏プログラムの中に、その曲「ガナパティ賛歌」を加えることにし、マンドリン、リコーダー、キーボード(佐野が日本から抱えてきたロールピアノ)で合奏の練習をする。

## 9月9日(土) ムンバイ “コンサート” — 日本へ —

今日はリコーダーの指導はせず、コンサートと子供たちに歌を歌ってもらい、それを録音した。後日、採譜して今後の指導に活かせたらと思ったからだ。  
リコーダーのテキストに子供たちの知っている歌があれば子供たちも興味を持って挑んでくれるだろう。コンサートはとても楽しかった。



私たちが帰るとき、男の子たちは私たちの車を走って追いかけてきた。女の子たちもいつまでも手を振っていた。  
私は、第一日目に子どもたちに会った時からすでに次の来訪を考えていた。大変だからこそ、このプロジェクトは是非続けたいと思った。

お土産など買い替え、飛行機の出発時間まで、空港近くの西村さんの知人宅で休ませていただき、そのお礼に、私たちはその親切な知人—インド人の老女医—に、演奏をプレゼントした。名残惜しいが、夜、そのお宅を出て空港に向かい、インドを後にする。

私の脳裏には、子供達のキラキラしたきれいな目の輝きが、いつまでも残っている。

## ムンバイ「光の教室」におけるリコーダー講習に参加して

福井保孝

最初にこの計画を聞いたとき、私の頭の中には「？」がいくつも並んだ。

確かに子どもたちが楽器に触れ、音楽を楽しみ、またその楽しさを友達と共有できるとしたらすばらしい。

しかし…しかし、何故リコーダーなのか？ 子どもたちのレディネスは？ 誰が継続した指導をするのか（出来るのか）？ ……同じ学童期の子どもといっても、日本の子どもたちは日常から西洋音階の音楽を耳にしているし、兄弟や年長の学童がリコーダーを吹いているのを見ているし聞きもしている。しかし、「光の教室」の子どもたちのいる環境は違う。果たして西洋音階を、リコーダーという楽器をスムーズに受け入れることが出来るのか？ それが可能としても、少しずつ長期間にわたる指導が必要である。年に数回の訪問でそんなことが可能なのか？ 考え出したらいくつも疑問や困難さばかりが頭に浮かんでくる。そんな中で、今回の教室訪問・リコーダー指導という「暴挙」に加わってしまった。

9月6日（水） 渡されたリコーダーに子どもたちは大喜び。しかし…、

ピーピー、ピーピー 耳を塞ぎたくなるようなすごい音。ま、とりあえずは新しい玩具。

9月7日（木） 左手のみの運指で少しずつ。差はあるものの興味を示し一所懸命音を作ろうとする子もいる。

9月8日（金） 昨日と同様の指導。しかし、進展は…???

9月9日（土） コンサート（リコーダーにマンドリン・キーボードを加えて合奏。子どもたちの歌。プレイクダンス）

このような流れで今回の「講習」は終わった。そして、リコーダーに慣れること、ソ・ラ・シの音を出すことすら出来なかった。…しかし、「失敗」とか「無理」という言葉は浮かんでこない。

相変わらずたくさんの「???’があるけれど。考えてみれば、出来なくて当たり前。まったく初めての楽器を持たされて、「さあ、やっごらん」といわれても…。日本の学校でだって全員が興味を持ってやっているわけではない。仕方なくやらされている子どもだっているんだし。興味を持って音を出そうとしていた子どもが少数でもいたこと、合奏を喜んで聞いてくれたこと、一緒に楽しむ時間を持てたことで今回の試みは「成功」といえるのではないかと思う。「リコーダーという楽器でこんなことが出来るよ」ということをデモンストレーションでき、子どもたちが使えるリコーダーは現地にあり、フローラ先生がこれに興味を持ってきている。継続していける足場は何かできたのではないかと思える。今後の私たちの取り組み次第できっと何か出来る。何よりも「リコーダーが子どもたちのもとにある」ということがありがたい。教室にリコーダーがあるということで、子どもたちが音楽に親しんでいく上で出来ることの幅が広がったと思う。とにかく継続していくことが大事、そして、私たちが教えるというのではなく、フローラ先生をサポートしていくという形で何か出来るのではないかと今は考えている。



## 個人的 インドな出来事

福井保孝

### ●水が止まらない…

(9月5日)

宿泊したホテル。先に予約していたホテルに断られるというハプニングがあり、代わりにと紹介されたこの宿。  
(この件で大変な思いをしたのは先にインド入りしていた花谷さんだけで、残りのメンバーがムンバイにいた時には一件落ち着いていたのだが) 部屋は少し狭いものの小奇麗で、ベッドの寝心地もいい。何よりシャワーからちゃんとお湯が出るというなかなかのホテルだった。しかし…ちょっとしたトラブルはやはり付き物のようで…。

外出から帰り部屋に入ってみると、ちよろちよると水の流れる音がある。トイレの水が流れっぱなしになっていたのだ。レバーをガチャガチャやってみたりしたけど、やはり水は止まらないのでフロントに電話して人をよこしてもらふことにした。やってきたのはハウスキーパーの兄ちゃん。彼はバスルームに入るとしばらくゴソゴソし、ほどなく出てきた。確かに水の音は止まった。直ったのかと問うとニヤリと笑いながら「OK」と言う。だがしかし、私は見ていた。兄ちゃんは修理などしていない。タンクの横についている水量調節のバルブを閉めただけ！

それでもとりあえず水の止め方はわかったわけで、このあと私と大塚君はバルブを回してトイレの水を流したり止めたりすることとなった。…で、兄ちゃんもちょっとバツが悪いのか、頼みもしないのに「エアコンがちょっとうるさいね」などと言いながら今度はエアコンのところまでなにやらゴソゴソ…。(お陰で約10分間ほどの間だけエアコンは静かになった)

いい加減だけれどなぜか憎めないこの兄ちゃんに10ルピーのチップをあげた。日本でこんなことがあったら絶対にフロントに怒鳴りこんでいただろうけれど。なぜか寛大になれるインド…

### ●ガラガラヘビの卵

9月5日の午後、インド門を訪れる。観光客たちの近くで1人の少年が何かを放り投げ、ギギギギ…とかジジジジ…とかいうような音を出していた。それは、奇妙な玩具。

細長い卵形の2個1対の強力な磁石で、手のひらの上に2つを少し離れさせて持ち、そのまま放り上げると互いに引き合ってくつつく時に微妙に振動してジジジジ…という音を出すのだ。ガラガラヘビの卵(Rattlesnake egg)という名前がついている。



およそ10歳くらいのその少年はこの玩具を観光客に実演して見せながら一所懸命に売っていた。こんな子どもが物を売るといことは、日本の子どもが親の商売の手伝いをしているのとは訳が違う。きっと元締めがいて、「これだけ売ってこい」と言われて「仕事」に出る。ちゃんと売れないで帰ったら、怒られたり殴られたりするんだろうな…などと考えてしまう。大塚君がこの子に遊び方を教えてもらって1つ買い、私も1つ買った。1つ20ルピー。お金を求めて手を出してくる子どもには絶対お金を渡したくないけれど、こういう少年からはつい買ってあげたくなってしまふ。恵んでもらうことに慣れて欲しくない、何らかの「仕事」をしてお金を得ることを覚えて欲しいと思うから。それにしても、この少年は英語を話し、ちゃんと計算も出来る。英語が通じない大人もたくさんいるというのに、彼はしたたかに生きる術を身に付けていっているようだ。今頃何をしているだろうか…？

### ●まじめなタクシードライバー

(9月8日)

9月8日の夜、Dr. ガナパティの招待でコンサートに行くことになった。会場の名前を書いたメモを渡されたのだが、アルファベットで書いてあるものなんと読むのかまったくわからない。(そのメモが今は手元がなく、とても残念なのだが) とりあえずホテルのフロントでそのメモを見せ尋ねるとタクシーで30分くらいの所だというので、私と佐野さん、飯田さんの3人でタクシーに乗ることにした。…で、通りでタクシーをつかまえたのだが、その運転手、どうも英語が通じない様子。メモを見せても「?」。それでも「Gandhi Market」という言葉は通じたようでなんとなく乗ることにした。タクシーは走り出したのだが、数十メートル行くと突然停車。運転手は例のメモを 掴んで車を降りて行ってしまった。「何事?」と思い目で追うと、彼は露店商の男のところへ行きメモを見せながらなにやら話している。まもなく戻ってきて再び車を走らせた。なんと彼はまじめに行き先を確認していたのだ。本当に30分弱で私たちは目的地に到着することが出来た。料金もメーターと換算表できちんと

清算。まじめな運転手に何故だか感心した次第…。

### ●眠気とタブラ

Dr. ガナパティに招待されたコンサート。シャナイというインドの管楽器（リード楽器）のアンサンブルなのが…。とにかく前置きが長い。演奏に入る前に紹介や表彰や挨拶などが延々1時間あまり。言葉の意味もわからず、ついつい船をこいでしまい隣に座っていたドイツ人の看護師から「お疲れのようですね」などと言われる始末だった。それでも演奏は眠気も吹っ飛んでしまうほどすばらしかった。ハルモニウムの通奏低音に始まり、タブラのリズムに乗せたシャナイのメロディーの心地よさ。そして圧巻はタブラのカデンツァ。2個1対の太鼓が複雑なリズムを刻みながら響き、次第に盛り上がりって壮大なクライマックスを作っていく。言葉では言い尽くせない感動を久々に味わった。

### ●水は大丈夫？

インドに限らず、海外ではとにかく水に気をつけるようにと言われる。水道水なんか絶対飲んじゃダメ。ミネラルウォーターを買って飲むこと。しかし、料理に使われる水はどうなのか？ レストランでも調理にミネラルウォーターを使うなんてことたぶんありえない。きちんと加熱してあれば大丈夫ということか…。

実のところ、9月7日に「教室」で給食のチキンスープをいただいた時、少し気がかりではあった。翌8日の朝、チャングース君が私にキッチンを見せてくれると言うのでついて行った。薄暗い室内ではあるが、石の床の上に水を入れるバケツとかコンロなどが整理して置かれている。チャングース君は何かの準備をするためコンロに点火した。すると30cmくらいの高さまで炎が燃え上がる…。その火力を見て、これならきちんと加熱できるとなぜか納得してしまった。お陰でお昼のチキンカレーは美味しくいただけだし、右手で食べる食べ方もなんとなくマスター出来たような…



### ●I Love You !

「教室」の子どもたちにちょっと変わった握手のやり方を教えてもらった。右手の人差指と小指とを立てて互いにつき合わせ、次に親指同士を突き合わせその親指を支点に手をくるりと翻して掌を合わせ握手をする。言葉は通じないものの身振り手振りで「こうやるんだよ」と教えられ、たくさんの子と握手を交わした。

ところがこの握手、前段階がありその動作に意味があることを後でチャングース君が教えてくれた。まず人差指だけをピンと立てる（これがアルファベットのIを表す）。次に親指を人差指と直角に立てる（こ

れはL）。それから親指を折り小指と人差指を立てる（これはU）。それから互いにつき合わせ握手の動作になる。すなわち、I, Love, You…握手！、というわけ。

たわいもない遊びのようだけれど、実はこれ、すごい魔力(?)持っているのかもしれない。手と手を触れ合わせるということで子どもたちと随分近づけたように思える。人と人とが仲良くなる上で言葉だけでなく手を触れ合わせることも本当に大切なことではないだろうか。そしてI Love You という気持ちで互いに向かい合うことも。私たちは「光の教室」の子どもたちを「支援する」と言うけれど、実は私たちが子どもたちからいろんなものをもらっている。そのことに感謝しながら、次に訪れる時も子どもたちと交わしたいと思う…

I, Love, You…握手！



去年は靴、今年は鞆を支給しました。



シャナイのコンサート

## インドな出来事

花谷 めぐむ

### ●スラムに足を踏み入れた！ (9月8日)

今回の収穫、それは初めてスラム内部（居住区）に入ったことだろう。スラム内部にはなかなか入れないし、外国人となればなおさらである。今回、BLPでケースワーカーをしている方に付いて、特別に歩いて中に入ることができた。入ってみてびっくりしたのだが、まず人が一人通れるか通れないかというような狭い路地の両脇に家が建っているのだが、衛生状態が非常に悪い。水道などはないし、下水もない。もちろん電気もない真っ暗な家（6畳ぐらい）のところに10人ぐらいが座っている。それが居住空間である。それでも、ここは屋根があるだけでした。屋根のない露天暮らしの人々はそれこそ数え切れないほどいる。このような条件下では、病気にならない方がおかしい。ハンセン病がなくなるのも無理はないと改めて思った。

(写真は、道路脇のスラム)



### ●インドのハンセン病—BLPの状況—

もう一つは、インド側のパートナーNGOであるBLPの状況である。インド政府は去年「ハンセン病撲滅宣言（インドからハンセン病は無くなったという宣言）」を出したのだが、これはもちろん現実とはほど遠い。現実にはハンセン病患者は無くなっていないし、新たな患者がどんどん出ている。ところが、この宣言によってインド政府がハンセン病患者に対する公的補助を大幅に削減してしまった。政府が患者の面倒をみなくなったため、NGOがそれを肩代わりするようになり、BLPが扱う患者数はうなぎ登り。遠くはグジャラート州からも列車を乗り継いでやってくるという。患者数は増える一方だが、インド政府からの補助が削られたため、財政的にも大変だと言っていた。例えば、ハンセン病にはいくつかの型があるのだが、Ⅱ型に限っては「サリドマイド」剤がよく効く。サリドマイドは、妊婦に処方すると胎児に影響が出るために禁止薬物になっているが、ハンセン病とあと2つの病気に限っては国際的に使用が許されている。だが、このサリドマイド剤、「1錠」が2ドルもする高価な薬剤であり負担が大きく大変だと、いつもモンsoon教室の子どもたちの健康診断をやって下さっているドクター・ラオは言っていた。



### ●インド人の結婚式—ラオ先生のめくるめく「結婚アルバム」—

このドクター・ラオ。実は新婚ほやほや。結婚式の写真見せて～という、ものすごく分厚いアルバムを見せてくれた。写真一つ一つにプリクラみたいな縁取りがしてあって「めくるめく世界」。奥さまとどうやって知り合ったの？と聞くと、「インドでは、恋愛結婚はほとんどないから、親が決めてきた」とのこと。カーズの釣り合いなどをみて、後は「星占い」で決めたそう。インドでは、結婚相手を星占い（非常に細かな星占い）で決めることがよくあって、それで、相性ぴったしという相手にしたそう。相手を見て、気に入ると、即、婚約式。婚約式から結婚式までほぼ3ヶ月で、時々（制限付きで）顔を合わせて話をすることはできるそう。



「手を繋いで、火の周りを3回回った？」（日本の三三九度に当たる儀式）って聞くと、「もちろん、でも、7回回った」とのこと。「7回も？」「うん、7回回ると、7世に渡って相手と一緒にいるんだ～」と嬉しそうに言うドクター・ラオ相手に、私は一言「too much 長すぎ～～」と言い放ったのだった。

### ●ハジ・アリ観光 命がけ！ (9月9日)

さて最後の日、空港に行く前にハジ・アリ廟に出かけた。これはイスラムの聖者の墓であり、海の中の道を渡って行く。干潮の時はただの海の中の道だが、満潮になると…海の下に沈む道である。私たちが着いた時は、ちょうど満潮を過ぎたあたり。ほとんどの道が波に覆われている。だが、インド人達はモノともせず歩いていく。私たちが歩き出したが、波が大きく、太股までずぶ濡れ。しかも波に足を取られそうになる。しかも波で道がどこにあるか見えない！命の危険を感じながら（大げさですが）、インド人達の後をついてハジ・アリ廟まで渡った。いやー、スリルとサスペンスに溢れていました…。一緒に行った、Tちゃんはここで一言「ほんまインドにおったら、ディズニーランドいらんな～」。はい、考えようによっては、インドというところ、毎日がスリルとサスペンスとエンターテイメントに溢れております…。



## 今回の訪問から

西村ゆり

### ●初めてのリコーダー指導

東京在住の佐野和子さんの仲介で、リコーダー奏者・吉澤実氏がギンザ・ヤマハにお声をかけてくださり、8月末、同社より新品のバロック式リコーダー50本が事務局に送られてきました。このご“寄贈”によって、「インドの子どもたちへのリコーダー指導」という“暴挙”（福井さんいわく）が、今回実行されたわけですが、佐野さん、福井さんの報告にもある通り、この試みは、子どもの状態を「見る」ことに終始しただけでした。

手探り、試行錯誤…そんな言葉しか浮かんでできませんが、それでも、教室の音楽環境の土台を築くために、レングを“ひとつ積んだ”くらいの成果はあったと、私自身は感じています。

ピーピーすさまじい騒音に顔をしかめる子ども。幼なすぎて楽器を持たせてもらえず、先生たちが用意してくださったプラスチックの“ちっちゃい子用”のおもちゃの笛で遊ぶ子ども…。4歳から15歳まで、30人が一緒にひしめく教室で、「はい、みなさん音を揃えて！」なんて、そもそもが無理な話でした。

子どもたちは、日本では想像もつかない厳しいスラム暮らしを、当たり前の日常として生きているのです。そんな子どもたちが、彼らの生活に全く縁のない楽器を、最終日までなんとか吹き通せたのは、リコーダー授業のあとの「ブレイクダンス講習」を、期間中一人でやり通した大塚君のおかげだったかもしれません。

（“がまん”のあとの“お楽しみ”？毎日子どもたちは、「さあすんだ！次はダンスだ！」と教室を飛び出し、やたらうれしそうにホールで飛び跳ねていたのです。）

9月6日、ランチの席で、BLPのガナパティ所長は「音楽より食べるのが先だ」と、はっきり言われました。でも、「そうだよなあ…」とつくづく納得しながらも、誰も「こんなことをやっても無意味だ」とは思わなかったのは、子どもたちを抱きしめ、一緒に音楽をする時間が全員ただひたすら楽しく、子どもたちも、私たちが、教室に“いる”こと自体がうれしくてたまらない！という顔をしてくれたからでした。

「音楽をともに楽しみ、人とつながっていく」…そのことを目標に、これまで光の音符が、日本で12年間繰り返してきた活動をインドでもやってみよう、と始まったこのリコーダー指導ですが、「それをやったところで、なにになるの？」と問われれば、まだ十分な理屈で説明が出来ません。これから更にたくさんの人と協力しあって継続していくうちに、いつかその本当の意味が見えてくるかも…という希望があるだけです。

そんななか、楽道家ぞろいの懲りない面々は、すでに「次の授業」に心を馳せているようなのであります。



### ●若さというもの

インド旅行初参加の智ちゃん。「大丈夫かなあ…」という周囲の心配をよそに、今回、だれよりもインドを楽しみ、あのいかめしいBLP所長・ドクター・ガナパティに、“ガナパティ”一象の顔をしたガネーシャ神の別名—の落書き（失礼！）をさせることに成功しました。インド体験をライブでつづった彼女の青い“日記帳”に描かれた、ガナパティ所長の貴重な「落書き」を公開します。



現在新しい職場で大忙しの大塚公平君。今回「報告」はパス、ということになりましたが、彼自身、3回目のインド訪問で、ひとまわりたくましくなった感がありました。1分も踊り続ければ、息が切れるというブレイクダンスを、毎日1時間、子どもたちに教え続けた功績は特筆すべきかと思えます。



しかし、この二人。インド人でも「人が多すぎて危険だし、テレビで中継を見れば十分」というガネーシャ祭りのハイライト、巨大なガネーシャの“はりぼて”を海に流す現場に行きたい！と言い出して困りました。

「勝手にいっついで」と放り出して、もしなにかあったら、引率した「もと先生」として言い訳できない…で、屋間の活動でくたびれきった体にむちうち、でかける羽目に。福井さんに同行を懇願し、こわごわでかけた現場は、まだ嵐の前の静けさ状態でほっとしたもの、物足りない顔の若い2人。なぜか私は、31（サートイーワン）で、彼らにアイスクリームをおごり、どっと疲れてホテルにもどったのでした。けれど、「白紙」でインドと触れ合う若い人の存在は、明るく、大きなものでした。